



Title	現代スペイン語における語順タイプの多様性とその頻度(3)
Author(s)	出口, 厚実
Citation	大阪外国語大学学報. 1986, 72(1), p. 1-16
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81106
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

現代スペイン語における語順タイプの多様性とその頻度 (3)

出口厚実

Orden de los elementos funcionales de la oración:
Sus variedades y frecuencias (3)

Atsumi DEGUCHI

Siguiendo el método empleado en Deguchi (1983, 1985a, 1985b, 1986) para presentar datos estadísticos sobre el orden de los constituyentes oracionales, procedemos en esta 3ª parte a la comparación de características cuantitativas de las frecuencias de las oraciones copulativas y no-copulativas. Por construcción copulativa se entiende aquí sólo la que contiene alguna forma del verbo estar o ser, descartándose los demás verbos predicativos con la función análoga. Se representarán también las diferencias de frecuencia entre los verbos copulativos cuando parezcan pertinentes.

Los principales criterios del recuento llevado a cabo son los siguientes:

- i) Combinaciones de los elementos oracionales, i. e. Sujeto, Verbo, Complemento Predicativo, Objeto Indirecto, Complemento Adverbial.
- ii) Posición absoluta del verbo dentro de la cláusula según el tipo de ésta.
- iii) Orden relativo de Sujeto-Verbo vs. Verbo-Sujeto en relación con el rasgo sintáctico del Sujeto.
- iv) Correlación entre los tipos SV/VS y la negación.
- v) Orden de colocación del Complemento Predicativo con respecto al verbo correlacionada con SV/VS.
- vi) Extensión de la oración o sea el número de los constituyentes contenidos en ella.
- vii) Colocación y concurrencia del Complemento Adverbial.
- viii) Fórmulas globales del orden de palabras con atención al elemento inicial y el número de los elementos concurrentes.

O. 拙稿 (1983, 1985 a, 1985 b, 1986) で現代スペイン語における文構成要素間の位置関係とその類型を様々な角度から計量的に記述しようと試みた。本稿を含めてこれらの調査は語順という統

語現象の中でどのような事実が数量化に適するかを検討し、統計的分析の基盤を固めるための試行的性格をもつものである。対象としたテキストは、ほぼ均質な文体から成る総数1073の現代文語文の連続集合体で、これまでに使用したのと同じ Corpus である。

一連の前稿で扱われた文タイプの分類基準は、節種（主節・補文節・関係節…）、再帰／非再帰及び肯定／否定などに限られ、若干の統計でこれらを変数とする数値を考察した。各文毎の語順原資料にはその文が含む核的動詞の語彙を不定詞形で記録してあるので〔cf. Deguchi (1983) : apéndice〕、動詞別にあるいは動詞の意味・統語的下位区分に細別した各種の集計を行うことも可能である。動詞語彙の異なりを考慮した語順パタンの変動を調べる第一段階として、今回は文の統語型式の大区分として伝統的に利用されている連結動詞文 vs 非連結動詞文を対比しながら、特に前者の類型に見られる語順のいくつかの様相をまとめてみたい。なお、連結動詞文とは、ここでは動詞 *ser* または *estar* の定形を含む文のみを限定して指し、これらと統語上類似の特徴をもつ他の構文は除外されている。資料体の中で *ser* を中心動詞とする文は圧倒的な頻度で第1位を占め185例が見出された。これは全体の17.2%に当たる。文動詞の頻度順からすると *estar* は度数29で第3位であった。両動詞のいずれかを含む連結動詞文の合計は214で、Corpus 全文の19.9%に相当する。

1. 1. 語順構成素の組合せ

語順構成素を主語（S）、動詞（V）、直接目的語（DO）、間接目的語（IO）、述語補語（PC）、副詞的補語（AC）の6範疇としたとき、いずれを組合せたタイプが多いかを調べたのが次表である。I～VIの6種のタイプについて頻度を調査したが、記号（+）はその記号が付された要素を含み、（-）はそれを含まないことを表わし、明示のない要素は計算の考慮外である。即ち、言及されない構成素は存在しようとしまいと該当の条件に合致するか否かの判定のみが行なわれている。ただし、DOは常に（-）なので、また+Vは文の必要条件でもあるので下表には記載しない。

(1)

タイプ	構成素組合せ	<i>ser</i>	<i>estar</i>	合 計
I	+ S, + PC, + AC	69 (37.3%)	13 (44.8%)	82 (38.3%)
II	+ S, + PC (- AC)	71 (38.4)	2 (7.0)	73 (34.1)
III	+ PC (- S, - AC)	23 (12.4)	1 (3.4)	24 (11.2)
IV	+ S (- PC)	6 (3.2)	9 (31.0)	15 (7.0)
V	+ PC, + AC (- S)	13 (7.0)	1 (3.4)	14 (6.5)
VI	(- S, - PC)	3 (1.6)	3 (10.3)	6 (2.8)

ser 文, estar 文ともに有主語で述語補語を含む文が多いが, それぞれのタイプ頻度の分布にはかなりの凸凹が見られる。特に主語と動詞のみから成り PC が共起しない構文 (第Ⅳ型) は estar 動詞については第 2 位の高率であるのに対し, ser 文では極めて低く全体の 3.2% に過ぎない点が目立つ。逆に ser を連結動詞とする文ではタイプⅡが最頻度で現われ相対的にこの型式が少ない estar 文と対照的である。両動詞文の差異は, +PC 文と -PC 文の比率で比較すると一層明確になろう [cf. (2)]。

(2)

	ser	estar	全 体
+PC の文	176 (95.1%)	17 (58.6%)	193 (90.2%)
-PC の文	9 (4.9)	12 (41.4)	21 (9.8)
合 計	185	29	214

コブラとしての機能により他の一般動詞と峻別される ser と estar が共起要素の組合せに関して上のような顕著な違いを見せるのは, 両動詞の語彙的意味の濃淡と結びつけて解釈できるかも知れない。estar は単に属性を主語に付帰させるだけでなく, 属性と主語との係わり方が過渡的なことを示したり, その属性の程度を主語の状況差を考慮して比較したり, 独自に所在を表わせるなど固有の表意機能を持つからである。一方, ser にはそのような自律的語彙性が欠如するので, 当然, 述語補語への依存度が高い。なお, 表(1)のタイプⅥの中には, 例えば (no) lo es のように, 動詞のみから成る文型の可能性が含まれるが, Corpus に実例は観察されなかった。この類型では全例に副詞的補語が随行していて最低で構成成分は 2 ケであった。

1. 2. 節種と動詞位置

動詞の文中絶対位置については既に若干の基準で前稿 (1983, 1985 b) で全資料体の通算値を出した。ここでは節種別に連結動詞文と非連結動詞文でどのような動詞順位の頻度差が存在するかを見てみよう。(4) は独立断定節と他種の節に 2 大別した場合の順位別比率である。

(3)

節種\順位	1	2	3	4	5	6	合計
a. 独立断定							
cop * ¹	34	79	19	4	0	0	136
non - cop	125	223	86	15	1	1	451
合 計	159	302	105	19	1	1	587

現代スペイン語における語順タイプの多様性とその頻度(3)

b. 疑問

cop	0	3	0	0	0	0	3
non-cop	5	5	1	0	0	0	11
合 計	5	8	1	0	0	0	14

c. 命令

cop	2	0	0	0	0	0	2
non-cop	12	2	0	0	0	0	14
合 計	14	2	0	0	0	0	16

d. 間接疑問

cop	0	3	1	0	0	0	4
non-cop	1	5	3	0	0	0	9
合 計	1	8	4	0	0	0	13

e. 補文

cop	5	17	2	0	0	0	24
non-cop	39	45	7	0	0	0	91
合 計	44	62	9	0	0	0	115

f. 内容*²

cop	1	0	0	0	0	0	1
non-cop	5	2	1	0	0	0	8
合 計	6	2	1	0	0	0	9

g. 関係

cop	0	18	9	1	0	0	28
non-cop	0	141	41	1	1	0	184
合 計	0	159	50	2	1	0	212

h. 副詞

cop	9	7	0	0	0	0	16
non-cop	39	47	5	0	0	0	91
合 計	48	54	5	0	0	0	107

i. 全体

cop	51	127	31	5	0	0	214
non-cop	226	470	144	16	2	1	859
総 計	277	597	175	21	2	1	1073

* 1 cop は連結動詞文, non-cop は非連結動詞文の略号である。

* 2 「内容節」の略。Deguchi (1983)での adnominal, 出口 (1985 a, b) で用いた連体節に相当する。

(4)

節種\順位	1	2	3	4	5	6
A. 独立断定節						
cop	25.0%	58.0%	14.0%	3.0%	0 %	0 %
non-cop	27.7	49.4	19.1	3.3	0.2	0.2
合 計	27.1	51.4	17.9	3.2	0.2	0.2
B. その他の節						
cop	21.8	61.5	15.4	1.3	0	0
non-cop	24.8	60.5	14.2	0.2	0.2	0
合 計	24.3	60.7	14.4	0.4	0.2	0
C. 全 体						
cop	23.8	59.3	14.5	0	0	0
non-cop	26.4	54.8	16.8	1.9	0.2	0.1
合 計	25.8	55.6	16.3	2.0	0.2	0.1

ser, estar を核動詞とする文と他の文型間で動詞の絶対位置には大差が見られないようである。連結動詞は冒頭位を占める率がやや小さく、第2位に立つ例が相対的に多くなっている。非連結動詞文よりも動詞第2位が高頻度なのは特に独立断定節で著しい。動詞位置は他の語順要素の配置と密接な関係を持つので、連結動詞文におけるSV語順の高頻度、主語省略文の低頻度などの事実と突き合わせて判断しなければならないであろう〔cf. §1.4～§1.7〕。

表(3)の統計のうち順位を無視して、copula 文／非 copula 文の節種別構成比を対照すると次の(5)が得られる。

(5)

	独立断定	疑問	命令	間接疑問	補文	内容	関係	副詞	全体
cop	63.6%	1.4%	0.9%	1.9%	11.2%	0.5%	13.1%	7.5%	100%
non-cop	52.5	1.3	1.6	1.0	10.6	0.9	21.4	10.6	100

8種の節タイプの中で、連結動詞文では独立断定節の比率が幾分高く、関係節・副詞節の生起率が一般動詞の構文よりも低いことがわかる。

1. 3. SV/VSと主語の属性

この節では動詞・主語間の先後関係、すなわち他要素の介在を考慮に入れずにどちらが先行するかを語の属性及び節種と関連づけて調べてみる。主語の属性は7種に区分されているが〔cf.拙稿(1985a:2)〕, この調査項目で該当する実例が ϕ である引用節, また節区分の ϕ 頻度である命令節・内容節は下表から省く。

(6)

i) 独立断定

語順\属性	w h	代名	定	不定	ϕ	節	合計
VS	0	5	5	0	0	9	19
SV	0	15	67	1	0	4	87
合 計	0	20	72	1	0	13	106

ii) 疑問

VS	0	0	1	0	0	0	1
SV	0	0	2	0	0	0	2
合 計	0	0	3	0	0	0	3

iii) 間接疑問

VS	0	1	1	0	0	0	2
SV	1	0	1	0	0	0	2
合 計	1	1	2	0	0	0	4

iv) 補文

VS	0	1	0	0	0	3	4
SV	0	4	9	2	0	1	16
合 計	0	5	9	2	0	4	20

v) 関係

VS	0	0	1	0	1	1	3
SV	23	0	2	0	0	0	25
合 計	23	0	3	0	1	1	28

vi) 副詞

VS	0	0	3	0	0	0	3
SV	0	0	6	0	0	0	6
合 計	0	0	9	0	0	0	9

vii) 全体

VS	0	7	11	0	1	13	32
----	---	---	----	---	---	----	----

S V	24	19	87	3	0	5	138
総 計	24	26	98	3	1	18	170

表（6）の合計値でみれば連結動詞文全体でS V，V S順序の割合はそれぞれ81.2%，18.8%になる。非連結動詞文との数値を比較すると次の通りである。

（7）A.

	cop	non-cop	全 体
S V	138 (81.2%)	435 (75.7%)	573 (76.7%)
V S	32 (18.8%)	140 (24.3%)	172 (23.1%)
合 計	170	575	754

B.

	wh	代名	定	不定	φ	節	全体
cop	14.1%	15.3%	57.6%	1.8%	0.6%	10.6%	100%
non-cop	18.8	11.7	57.9	6.8	1.0	3.8	100

主語が動詞に先行する文の比率は copula 文が非 copula 文を上回る。（7 B）からわかるように、主語の属性区分で大半を占める定名詞句は両方の文タイプではほぼ同率である。一方、不定名詞句主語の割合は非連結動詞文の方がかなり高率であり、当然これはV Sに有利に働く。またw h主語の生起率も ser, estar 文の方がより高く、やはりS Vを促進するので上述の差異はこれらの要因がからむと考えられる。

1. 4. S V／V Sと肯定

否定辞の有無と主題化・文長・動詞位置などとの関連性については前稿（1985 b：§ 2）で報告した。ここでは連結動詞文・非連結動詞文を下位区分してS V／V S語順と肯定・否定文の4分割表を掲げる。

（8）肯 定 文

	cop	non-cop	全 体
S V	123 (84.2%)	376 (75.2%)	499 (77.2%)
V S	23 (15.8%)	124 (24.8%)	147 (22.8%)
合 計	146	500	646

否 定 文

S V	15 (62.5)	59 (78.7)	74 (74.7)
V S	9 (37.5)	16 (21.3)	25 (25.3)
合 計	24	75	99

上表から見る限り、どの組合せにおいてもSVがVSよりも遙かに高頻度であるが、copula 文の否定文でVS語順が肯定文におけるよりも倍以上も出現確率が高い点が注目される。対照的に非連結動詞を含む文ではわずかながら肯定文のSV傾向の方が顕著である。

1. 5. SV/VSと助動詞

助動詞的動詞を含む文（定形動詞＋不定形動詞が構文の核となる文型）に関しては拙稿（1983：60-61）で、主語の絶対順位が他の文タイプと異なるかどうか調べたが、複合動詞文と非複合動詞文とでこの基準による明確な差異は認められなかった。今回の集計ではaux 文／非aux 文の他、連結動詞／非連結動詞とSV/VSの区別を比較することにする。

(9)

助動詞文			
	cop	non-cop	合 計
S V	7 (100%)	74 (85.1%)	81 (86.2%)
V S	0	13 (14.9%)	13 (13.8)
合 計	7	87	94
非助動詞文			
S V	131 (80.4)	361 (74.0)	492 (75.6)
V S	32 (19.6)	127 (26.0)	159 (24.4)
合 計	163	488	651
全 体			
S V	138 (81.2)	435 (75.7)	573 (76.9)

非連結動詞文がAuxを含む割合が15.1%であるのに対し、copula 文のそれは極端に低く、1.5%である。そして、この少ない事例の中ですべての文がSV語順を示していた。また、いずれの文タイプにおいても複合動詞文の方が主語先行の傾向が強いことをうかがわせる。

1. 6. SV/VSと述語補語

述語補語(PC)を文要素として含む文の総数は193であったが〔cf. 表(1)〕, PC-Vの先後関係では動詞の先行するケースが圧倒的に多く97.4%に達す。次表は連結動詞文におけるSV/VS/無主語とV-PC/PC-Vの関連を見ようとするためのものである。

(10)

	S V	V S	無主語	全体
V-PC	129	21	38	188
PC-V	1	4	0	5
合 計	130	25	38	193

述語が動詞に先行する事例〔cf. 出口(1985a:7) PCの主題化〕は極めて少数しか記録されなかったが、一般のDO, IO 主題化に見られるのと同様に、主語・動詞の倒置を強く誘発する。もっともVSならばPC-V 順になるという逆の関係はない。参考までに述語補語位置の節種別の分布状況を(11)に示す。

(11)

語 順 \ 節 種	独立断定	疑問	命令	間接疑問	補文	内容	関係	副詞	全体
V-PC	124	2	2	2	22	1	23	12	188
PC-V	3	1	0	1	0	0	0	0	5
合 計	127	3	2	3	22	1	23	12	193

1. 7. 主語の位置と文長

文中の語順要素の個数と主語の絶対位置との関係については既に資料全体の統計を前稿(1985a:11)でまとめた。同じ要領でcopula文に関してのみ集計した度数が(12)で、(13a)は主語の順位別の百分比を示す。表(12)ではSの位置φは無主語文であり、これを除いた有主語文だけの構成比率を別表(13b)に求めた。

(12)

Sの位置 \ 文 長	1	2	3	4	5	6	7	合計
0	0	26	12	5	1	0	0	44
1	0	0	59	45	7	2	1	114
2	0	4	1	14	5	3	1	28
3	0	0	16	3	1	0	0	20
4	0	0	0	5	0	0	0	5
5	0	0	0	0	3	0	0	3
合 計	0	30	88	72	17	5	2	214

合 計		(13) A.							B.						
S の位置	文 長	2	3	4	5	6	7	合計	2	3	4	5	6	7	合計
∅		86.7	13.6	6.9	5.9	0	0	20.6							
1		0	67.1	62.5	41.2	40.0	50.0	53.3	0	77.6	67.2	43.8	40.0	50.0	67.1
2		13.3	1.1	19.4	29.4	60.0	50.0	13.1	100.0	1.3	20.9	31.3	60.0	50.0	16.5
3		0	18.2	4.2	5.9	0	0	9.4	0	21.1	4.5	6.3	0	0	11.8
4		0	0	6.9	0	0	0	2.3	0	0	7.5	18.8	0	0	2.9
5		0	0	0	17.7	0	0	1.4	0	0	0	0	0	0	1.8

次に、文の含有構成素数のみに着目して ser 文・estar 文・非 copula 文の 3 文種間を比較したのが (14) である。B 表は文長別の百分比を示す。

(14) A.

動詞\文長	1	2	3	4	5	6	7	8	9	合 計
ser	0	27	79	59	14	4	2	0	0	185
estar	0	3	9	13	3	1	0	0	0	29
non - cop	16	161	290	233	119	27	10	2	1	859
合 計	16	191	378	305	136	32	12	2	1	1,073

B .

動詞\文長	1	2	3	4	5	6	7	8	9	合 計
ser	0	14.6	42.7	31.9	7.6	2.2	1.1	0	0	100.0
estar	0	10.3	31.0	44.8	10.3	3.5	0	0	0	100.0
non - cop	1.9	18.7	33.8	27.1	13.9	3.1	1.2	0.2	0.1	100.0

上表で estar 文の変域が文長 2 ～ 5 と狭いのはその絶対頻度の小ささと無関係でないと推定されるが、非 copula 文・ser 文の最頻文長が 3 であるのに対し、estar 文では大差を以って 4 要素文が最高値を示している。また連結動詞内でも ser の文長の分布が estar よりも低い数値に片寄っているのが認められる。なお文長の平均値は ser 文, estar 文, 非連結動詞文でそれぞれ 3.43, 3.66, 3.48 であった。

1. 8. 副詞句の位置

文に含まれる副詞句（副詞・副詞句・副詞節など動詞の述部を構成する諸々の副詞的修飾成分；状況補語とも呼ばれる）の概括的な統計値については拙稿（1986）で扱った。本

稿は連結動詞に対象を絞り、ほぼ同様な集計基準を適用した。1文当りの含有AC数の頻度を調べたのが(15)である。

(15)

副詞句数	cop	non-cop
∅	101 (47.2%)	295 (34.3%)
1	83 (38.8)	329 (38.3)
2	24 (11.2)	173 (20.1)
3	4 (1.9)	52 (6.1)
4	1 (0.5)	7 (0.8)
5	1 (0.5)	3 (0.3)
合 計	214	859

ser/estar 文では副詞句を全く伴わないケースの比率が非連結動詞文に比べかなり高く、また共起するACの個数も全般に少ない傾向を示す。特に2ヶ以上の副詞句を持つ文はcopula 文で14%であるのに対し、非 copula 文では27.4%と倍近い格差を見せている。

前稿(1986: §2.1)と同じ要領で動詞前位と後位に分割して、文中での絶対位置と副詞句としての重出回数を調べた。下表(16)は連結動詞文における全副詞句の生起を数え上げた頻度数で、x軸上の目盛りは同一文中でのACとして何度目の出現かの値を、y軸上に文中語順要素としての順位を表わす。

(16)

A. 動詞前位

順位\回数	1	2	合計
1	45	0	45
2	8	4	12
3	0	4	4
合 計	53	8	61

B. 動詞後位

順位\回数	1	2	3	4	5	合計
1	0	0	0	0	0	0
2	6	0	0	0	0	6
3	20	2	0	0	0	22
4	32	8	0	0	0	40
5	2	10	2	0	0	14
6	0	2	4	1	0	7
7	0	0	0	1	1	2
合 計	60	22	6	2	1	91

C. 全 体

順位\回数	1	2	3	4	5	合計
1	45	0	0	0	0	45
2	14	4	0	0	0	18
3	20	6	0	0	0	26

4	32	8	0	0	0	40
5	2	10	2	0	0	14
6	0	2	4	1	0	7
7	0	0	0	1	1	2
合 計	113	30	6	2	1	152

2. 連結動詞文の語順パターン

連結動詞 *ser・estar* について文構成成分の配列パターンの種類と頻度を以下にまとめることにする。

2. 1.

ser 及び *estar* を核動詞とする文の語順パターンをその頻度の高い順に並べたのが表(17)である。動詞 *ser* に関しては34, *estar* では17の異なる類型が見られた。

(17)

A. *ser* 185例

S-V-PC	56	V-PC-AC	2
V-PC	23	S-PC-V-AC	1
S-V-PC-AC	21	PC-V-S-AC	1
AC-S-V-PC	13	AC-AC-V-PC	1
V-PC-S	11	AC-V-S	1
S-V-AC-PC	9	V-S-PC	1
AC-V-PC	7	AC-S-AC-V-PC	1
AC-S-V-PC-AC	4	V-AC-AC	1
V-S	4	S-V-PC-AC-AC-AC	1
PC-V-S	3	AC-S-V-AC-AC-AC-AC	1
AC-V-PC-S	3	S-V-PC-AC-AC	1
S-AC-V-PC	3	AC-V-PC-AC-S	1
AC-V-PC-AC	2	AC-V-S-PC	1
AC-S-AC-V-PC-AC	2	V-AC-PC-AC-AC	1
AC-AC-V-PC-S	2	S-AC-AC-V-PC-AC-AC	1
S-AC-V-PC-AC	2	AC-AC-S-V-PC	1
V-AC	2	V-AC-PC-S	1

B. *estar* 29例

S-V-PC-AC	7	S-V-AC	4
-----------	---	--------	---

V-AC	2	AC-V-S	1
S-V-PC	2	V-PC	1
S-V-AC-AC	2	S-V-AC-PC-AC	1
V-PC-S-AC	1	S-AC-V-PC-AC	1
AC-S-V-PC-AC	1	S-AC-V-PC	1
V-PC-AC	1	S-V-PC-AC-AC	1
AC-V-AC-S	1	AC-S-V-AC	1
AC-V	1		

連結動詞と組み得る語順要素は他の一般動詞の場合と同じでないため、当然、文構成素配列の様相は出口 (1983 : 61-63, 1986 : 2-6) で見た Corpus 総体の頻度分布と比べれば大きな差異が存在する。予想された通り、copula 動詞文に最も多い構文は S-V-PC であるが、estar 文のみに限定するとこのパタンの末尾に副詞的補語の付加された S-V-PC-AC が最頻値を示す。これら 2 型を併せると ser・estar 文全体で総数の 4 割強に達する。非連結動詞文の最多類型である S-V-DO, 74 例とそれに次ぐ V-DO, 50 例の 2 タイプ合計が全体のわずか 14.4% である事実を比較すれば前者の文種で語順が特定のタイプに集中していることがよくわかる。

2. 2.

前項の ser 及び estar のパタン頻度を合算して構成素別及び文長別にブロック化し整列した形で分布状況を詳しく見てみよう。下表 (18) は動詞→主語→述語補語→副詞を優先カテゴリ順位とみなして再配列したものである。

(18)

a. V先頭 (10 パタン)

V-S	4	V-PC-AC	3
V-S-PC	1	V-AC	4
V-PC	24	V-AC-PC-S	1
V-PC-S	11	V-AC-PC-AC-AC	1
V-PC-S-AC	1	V-AC-AC	1

b. S先頭 (12 パタン)

S-V-PC	58	S-V-AC-PC	9
S-V-PC-AC	28	S-V-AC-PC-AC	1
S-V-AC	4	S-V-AC-AC	2

S-V-PC-AC-AC	2	S-AC-V-PC	4
S-V-PC-AC-AC-AC	1	S-AC-V-PC-AC	3
S-PC-V-AC	1	S-AC-AC-V-PC-AC-AC	1
c. PC先頭 (2 パタン)			
PC-V-S	3	PC-V-S-AC	1
d. AC先頭 (17 パタン)			
AC-V	1	AC-S-V-PC-AC	5
AC-V-S	2	AC-S-V-AC	1
AC-V-S-PC	1	AC-S-V-AC-AC-AC-AC	1
AC-V-PC	7	AC-S-AC-V-PC	1
AC-V-PC-S	3	AC-S-AC-V-PC-AC	2
AC-V-PC-AC	2	AC-AC-V-PC	1
AC-V-PC-AC-S	1	AC-AC-V-PC-S	2
AC-V-AC-S	1	AC-AC-S-V-PC	1
AC-S-V-PC	13		

上の表から先頭文成分別の度数を抜き出して構成比を求めれば次のようになる。

(19)

先 頭	頻 度	比 率
S	114	47.3 %
V	51	21.2
AC	45	18.7
PC	4	1.7
合 計	214	

連結動詞文の文長に注目して語順類型を集塊させ同一文長内では頻度降順に並べたのが(20)である。なお、本節での語順成分数の計算においては助動詞の動詞+動詞は1動詞とみなされているので、Aux もまた有効要素数と数えた§1.6.の「文長」での各数値と一致しない所がある〔cf. 拙稿(1986:2)〕。いずれにせよ ser 文と estar 文両型を合算すると、3要素文の出現度数が最頻で、これは非連結文が示す傾向と合致している。

(20)

a. 2成分 (4 パタン) 計 33

V-PC	24	V-AC	4
V-S	4	AC-V	1

b. 3成分 (7 パタン) 計 90

S-V-PC	58	V-PC-S	11
--------	----	--------	----

AC-V-PC	7	AC-V-S	2
S-V-AC	4	V-S-PC	1
V-PC-AC	3	V-AC-AC	1
PC-V-S	3		

C. 4成分 (15 パタン) 計 69

S-V-PC-AC	28	V-AC-PC-S	1
AC-S-V-PC	13	S-PC-V-AC	1
S-V-AC-PC	9	PC-V-S-AC	1
S-AC-V-PC	4	AC-V-S-PC	1
AC-V-PC-S	3	AC-V-S-AC	1
S-V-AC-AC	2	AC-V-AC-S	1
AC-V-PC-AC	2	AC-AC-V-PC	1
V-PC-S-AC	1		

d. 5成分 (9 パタン) 計 17

AC-S-V-PC-AC	5	S-V-AC-PC-AC	1
S-AC-V-PC-AC	3	AC-V-PC-AC-S	1
S-V-PC-AC-AC	2	AC-S-AC-V-PC	1
AC-AC-V-PC-S	2	AC-AC-S-V-PC	1
V-AC-PC-AC-AC	1		

e. 6成分 (2 パタン) 計 3

AC-S-AC-V-PC-AC	2	S-V-PC-AC-AC-AC	1
-----------------	---	-----------------	---

f. 7成分 (2 パタン) 計 2

S-AC-AC-V-PC-AC-AC	1	AC-S-V-AC-AC-AC-AC	1
--------------------	---	--------------------	---

2. 3. 副詞句と語順パタン

文の基幹を形成する要素でない副詞的補語を除去すると、構成素の配列パタンはどのように変化するだろうか。ACを無視すると連結動詞文に関して見出される語順パタンは9種類に減少するが、次表(21)ではその頻度明細を、副詞句の有無別にそれぞれ右欄・左欄に記す。百分比は各配列類型での副詞的成分を含まない文・含む文の比率を示す。

(21)

型	-AC	+AC	合 計
S-V-PC	58 (45.0%)	71 (55.0%)	129
V-PC	24 (63.2)	14 (36.8)	38

V-PC-S	11 (57.9)	8 (42.1)	19
S-V	0	8(100.0)	8
V-S	4 (57.1)	3 (42.9)	7
PC-V-S	3 (75.0)	1 (25.0)	4
S-PC-V	0	1(100.0)	1
合 計	101 (47.2)	113 (52.8)	214

Corpus 全体を見た同様な集計表〔cf. 出口 (1986: 表 (10))〕では目立たなかった点であるが、上表で動詞が末尾に立ちかつ-A Cである語順型、つまりVが最後尾の位置を占める例が見出されないのが確認される。反対にVが文の第1成分となるタイプではいずれも-A C $\geq$ +A Cであり、主語がV、PCに先行する配列パターンでは必ず-A C<+A Cになっている。

3. 結 び

文構成素間の相互順序に影響を与えると考えられる統語上の諸要因のうち、特に本稿では各構成素を統括する中枢成分である動詞の基本特性〔土連結的〕を考慮して様々な語順の量的側面を調べた。統計表はその目的からして主に次の3種に分類される。1つはこれまでに試みた諸基準の分析を、ser文・estar文に限定して計算集計したものである。第2に、両動詞を併わせた連結動詞文v s非連結動詞文の間の語順上の相異を調査しようと意図したものであった。3番目に、対照が有意義と思われる場合にはser動詞文/estar動詞文間の個別値を出して比較し、時にはさらに非連結動詞文とも対置させた。

(1986年4月20日)

REFERENCIAS

- Deguchi, Atsumi (1983), Aspectos cuantitativos del orden de palabras en el español contemporáneo. — *Lingüística Hispánica* 6, pp. 55-66.
- 出口 厚 実(1985a), スペイン語における主語・動詞・目的語の語順に関する量的考察 — *Estudios Hispánicos* 10, pp. 1-17.
- (1985b), 現代スペイン語における語順タイプの多様性とその頻度(1). — 大阪外国語大学学報 No. 70-1, pp. 1-17.
- (1986), 同 上 (2). — 大阪外国語大学学報 No. 71-1, pp. 1-11.